

第2表：地方自治体の分布（第11図参照）

県名	面積	土質	地方自治体	
			数	平均面積
ドレンテ	2648km ²	砂地	34	78km ²
オーヴェル・エイッセル	3802 "	砂地	46	83 "
南オランダ	2867 "	粘土	150	19 "

味していた。また、オランダ語の *oever*（時間）という単語は、「潮」という意味の単語 *oever* を語源とするものとみてよい。

水の危険は、粘土質の低地の住民たちの意識に強く反映し、昔のオランダ人の社会やモラルに対して大きな影響を及ぼしたものとみてよい。中世前半（五百年～千百年）においては、粘土質の低地に都市が発達する好条件はなかった（現存する都市の大部分は、ローマ帝国時代の砦であった）。加えて人口が希薄であったため、ライン川やムーズ川に沿って、堤防を維持し後背地を守りうる程度の小共同体の村を、堤防の裏側に定距離をおいて建設するのが、最も有利な方法であった。このことは、現在のライン川とムーズ川の間地域だけで、約百三十の小さな地方自治体が残っているという事実からも、たやすく追証できよう（第2表）。

中世において、それら小共同体の村は、すぐそばの堤防を維持する責任を担っていた。堤防建設の初期には破損が多く、破損の起こった地域のあらゆる教会が、危険なあいだ尖塔の鐘を鳴らし続け、その音を聞くと誰もが堤防の修理や被災者の救助に行くという習慣があった。救助することは、常に避けることのできない社会的義務であったから、ついにはオランダ人の価値観の一部に組み込まれたように思える。救助するに際してのオランダ人の特徴は、友人であれ敵であれ、また助けられる人の性格、出生地、宗教など、一切無関係だということである。このようなモラルは、人口の希薄な土地において水と戦うには全員の力が必要であったのだから、よく理にかなったものと言えよう。堤防の破損が少なくなった現在でも、オランダ人には、助けに行こうとする気持ちに駆り立てられているような感じが見受けられるのである。

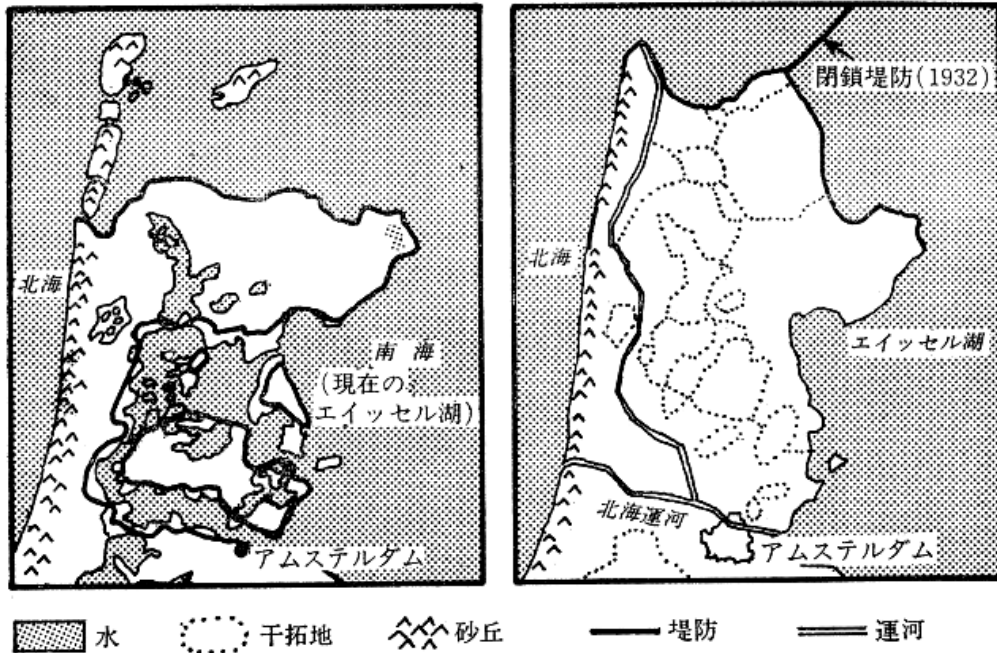
これは、言い換えれば、オランダ人が「安全」ということに対する強迫観念に取り付かれているような国民になった、ということであろうか。金貨や銀貨などを古い靴下のなかに秘蔵する昔の習慣⁽²⁾や、十七世紀以来さまざまに改良を重ねたオランダの銀行の保険証券、また現在のオランダ国家のほぼ完璧な社会保障制度は、そういった強迫観念の時代ごとの表現ともみなしうるように思う。

さて、当然のことであるが、(堤防が破損した時)協力するというモラルは、砂地の住民たちよりも粘土質の低地の住民たちに、より必要だったのである。ただし、堤防が破損した時以外は、人口が希薄だったせいで、堤防ぞいの住民たちは、隣村の人々を除くと、他の村の人々にあまり接触することがなかった。それぞれの村は、いずれもすぐそばの堤防の責任者であり、村人たちは通常、自分たちが決定したとおりに生活できた。そのために、十五世紀以後ヨーロッパに出現した中央集権主義を、自力で土地を守っていた昔のオランダ人たちは快く迎えたかったのである。しかも、堤防を維持するには誰の力も同様に必要であったから、粘土質の地方では身分相違の意識があまり強くなることはなかった。そういった寛容主義は各人共通の危険に促されたものといえるし、他方、地方分権主義が強かったことは、各地方に特有の衣装があることにも現われていると言えよう。

最後に、オランダ人の堤防建設に関連する伝統として、科学技術があげられる。オランダで発明された、あるいは改良されたものとして、水門、可動橋、浚渫機、ケーソン(潜函)、時計、気圧計などがある。また、オランダが世界一の先進国となった学問として、水力学があげられるのは当然であろう。

ただし、オランダの成立に最も大きな影響を及ぼしたものは、排水器として使われた機械、すなわち風車や蒸気機関などである。堤防建設の初期における、堤防に守られた低地の最も重要な問題は、雨などの時の地下水の過剰であった。堤防に設けられた水門は、一方にのみ水が流れるように作られていて、干潮時に過剰な水を排出していた。ところが、低地のまん中には、常時泥炭を掘り出す場所に大きな湖ができてしまい、嵐の時ともなる

A. 西フリースランド (1300年以前) B. 北オランダ州 (1932)



第10図 干拓地の拡大

Aは13世紀(排水風車の使用以前)の、Bは現代のオランダ州北部。

第3表：干拓地の拡大(第10図参照)

時代	年間	エネルギー源	干拓地面積
13~15世紀	300	風	105,850ha
16~17世紀	200	風	187,940 "
18~19世紀	200	風, 蒸気	193,400 "
20世紀	80	電気	240,000 "

と、背後からの思いがけない危険となるのであった。そこで、平面的なオランダには風が特に強く吹くことを利用して、十三世紀以後、風力が排水に使われ始めたのである。その技術が完成された時、つまりオランダのあの排水風車が発明された時、その成果には目をみはるものがあった。排水風車の使用によって、干拓地の規模が飛躍的に拡大したのである。十九世紀の蒸気力による革命当時は、排水用その他の風車は、オランダ全体で九千台を数えたという(第10図、第3表)。

オランダ人は、いつも科学技術に依存してきたから、道具などを大切に、外観の美しさよりも強靱さとかの実用性を尊ぶ傾向がある。その意識

は、オランダ人が今でも、*deugdelijk* (道徳的) と同じ単語をしばしば *degeijk* (強靱) という意味で用いることにも、現われているかもしれない。

オランダ人の国民性を形成した風土的要因として、右のことからの他に、ライン川が貿易にとって好適であったことを忘れてはならない。ローマ帝国時代から、現在のオランダ地帯の住民たちはライン川を通商路として利用していた。ライン河畔にあったフリーゼン人のドレストアド (*Dorestad*) 市は、中世前期の貿易センターとして繁栄した。けれども、この町を潰滅させたバイキングの襲来以後、ほぼ四百年の間、ライン川の貿易は不活発であった。それが回復したのは十三世紀に入ってからで、中世末期にはオランダの船がバルト海までも通商に出かけたのである。

オランダ人の貿易に関連する伝統としては、堤防建設の場合と同じく水と風とについての経験的知識を応用した、造船術があげられる。ライン川専用の *Rijnak* という川船が、大昔からライン川に沿って建造されていたことは、*Rijnak* の語尾 *ak* が「木の幹」を意味することからも理解できるのではあるまいか。また、本来北海向けのオランダ製の外海船も、中世末期からずっと高く評価されつづけてきたのである。

ところで、オランダ人が天下に名高いケチなのは、おそらく、堤防の破損に備えた貨幣などの秘蔵癖と、代々の貿易業従事という二つの風土的要因からくる国民的習性であるのだろうと思っている。

むすび

海面下にある粘土質の低地という特別な環境は、ローマ帝国の分解から、中世の約千年の間を通じて、ヨーロッパ

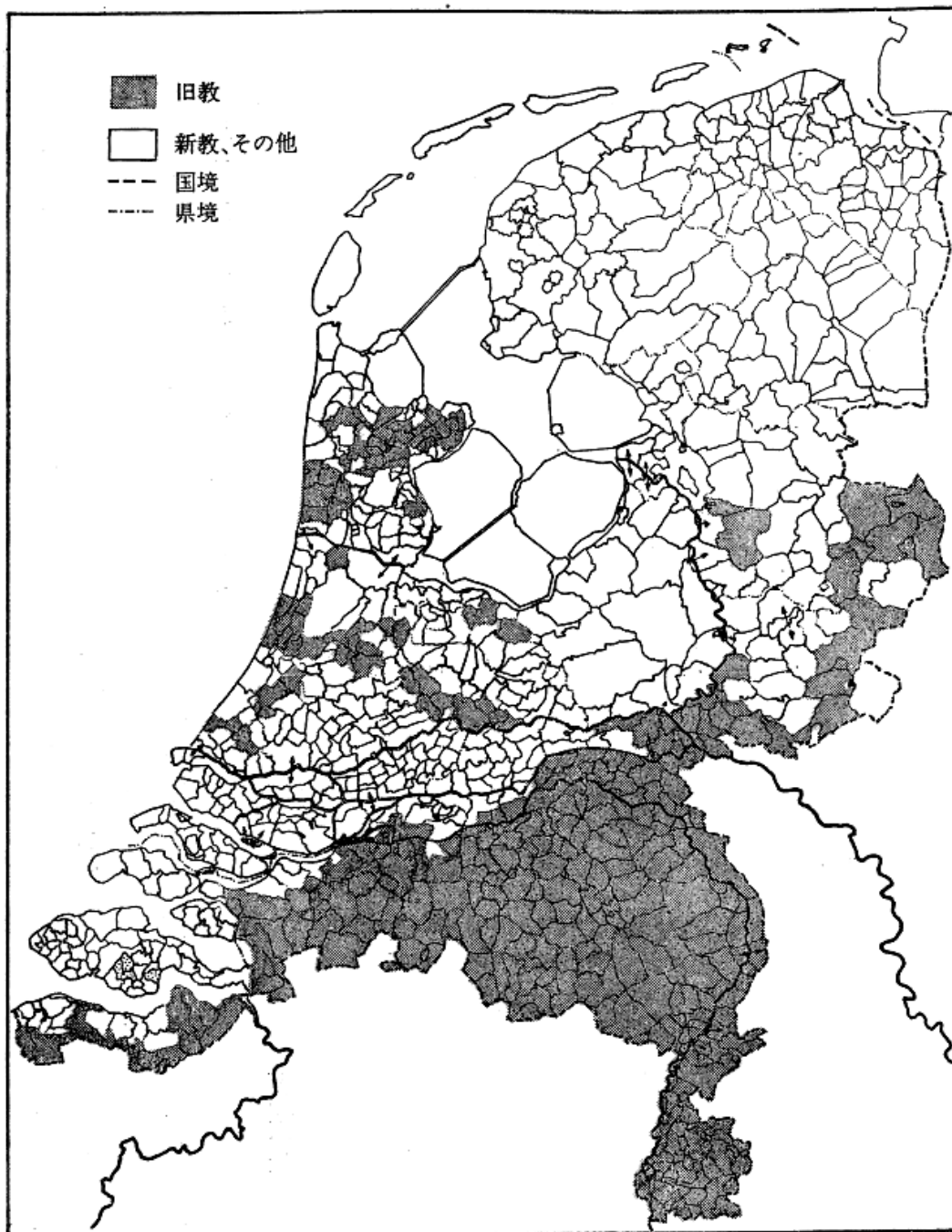
ツパ北西部に位置するライン川の三角州の文化に、前述したような特徴を付与し続けたものと思う。

この地域の支配権は、収税をのぞけば、古くから名ばかりのものにすぎなかったようである。それを、中世末期の中央集権主義者ブルゴニニュ公家を経て、スペイン王家が受け継いだ。ところが、その時には時代が転換しつつあったのである。

中世を通じてヨーロッパ全体の人々は旧教の信徒であつたけれども、十六世紀、スイスのカルピンの生み出した新教が、オランダで急激に人気を博した。その時までには、粘土質の地域の住民たちは、年々商業に携わり貯蓄に励んだせいで、ヨーロッパ全体の人々に比べて金持ちになり、加えて、自力で土地を守ってきたために個人主義者となつていた。また、オランダにしるスイスにしる、生活環境が厳しく、生き残るためには個人は誰でも大切にされねばならなかつたのである。したがって、海面下のオランダと山岳地帯のスイスとに住む多くの人々が、旧教に不満をいだいたのは決して偶然ではない。カルピニズムが強調する神と個人との直接的関係は、旧教の教会がもつ調停の機能よりも、オランダとスイスに生まれた文化にふさわしいものであつたとみて誤りない。

このように考えてくると、粘土質の地域の歴史的過程と、南部および東部の砂地のそれとは異なつていたのであるから、その相違が最初に宗教的な争いとして現象化したことも、不思議とするには当たるまい。スペイン国王に反対するオランダの一揆が起こつてから、すでに四百年が経過した。にもかかわらず、現在のオランダの東部また特に南部の砂地の住民たちは、今でも旧態依然とした旧教徒であり、カルピニストの大部分は粘土質の地域に住んでいるのである(第11図)。

まだスペインに対する独立戦争を戦つていたころ、オランダ人は、日本に來航し通商を開始した。ただし、オランダ人の国民性は、それ以前の千年間に既に形成されていたのであり、現在でもほとんど変わることなく生き続けている。



第11図 現代のオランダ (1960) における地方自治体ごとの宗教分布

土質の関係については第5図参照。なお粘土質のオランダ州にある旧教の飛地は、排水風車を使用した干拓が進む以前の地域ばかりである(第10図A参照)。また、ライン川北方やオランダ東部の砂地では、粘土質の地域の影響が強かった。

〔注〕

- (1) 一説には、*Hoï*(穴)は旧オランダ語で「沼沢」という意味があったので、*Holland*は「沼沢の国」を意味したともいう。
(2) オランダでは、*een appeltje voor de dorst*(渴いた時のためのリンゴ)と言われる。

付記 末筆ながら、貴重な資料を貸与されたオランダ領事 G. M. Krussink 氏に厚く謝意を表し、また、拙稿の日本語について助言を与えられた赤瀬信吾氏に感謝する。

—於京都、一九八一年初春